



「フランス語のリエゾン現象における 社会言語学的要因の考察」

日本ロマンス語学会第48回大会
5月23日(日)自由テーマ

東京外国語大学大学院博士後期課程1年
近藤野里
norikondothesis@gmail.com

本発表の目的



- ①フランス語発話におけるリエゾン実現に影響する社会言語学的要因の整理。
- ②AIXコーパスを用いた、日常会話的な発話における、社会言語学的要因の影響の考察。



発表の流れ

- 1. フランス語におけるリエゾン
- 2. リエゾンの社会言語学的要因
- 3. 分析と考察
- 4. 終わりに



1. フランス語におけるリエゾン

リエゾンとは



リエゾンとは

発音しない語末の子音字の後ろに、母音や無声のhが続く時、語末の子音字が次にくる母音と共に発音される現象のことをリエゾンと呼ぶ。

例えば、

形容詞 **petit** /pti/ (小さい) は名詞 **chat** /ʃa/ (猫) とともに発音されると
→ **petit chat** /ptiʃa/ (小さな猫)

母音で始まる名詞 **arbre** /ɑʁbʁ/ (木) とともに発音されると...

→ **petit arbre** /pti **t** ɑʁbʁ / (小さな木)



また、リエゾンは常に実現されるわけではなく、義務的リエゾン、選択的リエゾン、禁止的リエゾンといったコンテクストに依存する。



2. リエゾンの社会言語学的要因

リエゾンの社会言語学的要因



特に選択的リエゾン(variable liaison)への影響。

- ①社会階層
- ②発話状況
- ③文体
- ④性別
- ⑤年齢

社会階層



- -Booij et De Jong (1987):「高い社会階層に属する話者は、低い階級の話者と比較してリエゾンをより実現する」
 - -Encrevé(1988):Laks(1980)によるVillejuif(パリ郊外の工場地域)での調査から、その地域の若者のリエゾン実現率の低さを示す。
- 社会階層によって、リエゾンの実現に偏りが見られる。

発話状況



- Léon(1971) : シャルル・ド・ゴール大統領の10回の演説間での比較。

例) 1961年: フランスのある地方での演説・・・9%
ロンドンでの演説・・・100%

→発話状況に応化して、リエゾンの実現率を増減する傾向がある。

発話スタイル



- Delattre(1966): 発話スタイルに応じたリエゾン実現。
 - 親しい会話
例: Des [z] hommes / illustres/ ont/ attendu.
 - 丁寧な会話
例: Des [z] hommes / illustres/ ont [t] attendu.
 - 会議
例: Des [z] hommes [z] illustres/ ont [t] attendu.
 - 詩の朗読
例: Des [z] hommes [z] illustres [z] ont [t] attendu.
- Howard (2006) :「発話スタイルが高くなると、/p/、/r/、/k/のようなりエゾン子音が出現する可能性が高くなる」

性別



- Ashby(1979): 男性 > 女性

- Malécot(1975)、Booij et De Jong(1987): 女性 > 男性
- Ranson(2008): 女性 > 男性
(ただし義務的リエゾンを除くと性別に違いなし。)

年齢



- Booij et De Jong(1987) : 年齢高 > 年齢低
- Ranson(2008) : 年齢高 > 年齢低

「低年齢層は高学歴であるにも関わらず、高年齢層がリエゾンをより実現」

-
- Malécot(1975) : 年齢低 > 年齢高

→ 発話の相手の年齢によって、使用する文体が変わる可能性がある。



3. 分析と考察

AIXコーパスについて



AIXコーパス(エクサンプロヴァンスコーパス): 東京外国語大学21世紀COEプログラム『言語運用を基盤とする言語情報学拠点』によって2005年に収集されたコーパス。

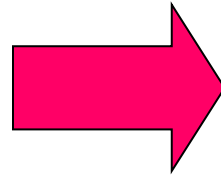
- 録音場所: 南フランス、エクサンプロヴァンス
- 時間: 21時間のうち、3時間36分(14会話)を分析に使用。
- 男女内訳: 男性10人、女性9人(14会話での内訳)
- インフォーマント年齢: 20代~70代
- 発話内容: 主に日常会話(天気、職業、大学での勉強について等)。その中に自然会話(10ファイル)とロールプレイング性を持つ即興劇的会話(銀行、不動産屋、市役所、旅行代理店)が4会話分含まれる。

→各発話におけるリエゾン実現回数の1分間平均を分析に使用。(全体平均:5.82回/min)

AIXコーパスを用いた調査内容



- 社会階層
- 発話状況
- 文体
- 性別
- 年齢



- 年齢
- 性別
- 発話状況

→AIXコーパスでは、以上の要因の影響性の考察が可能である。

年齢①



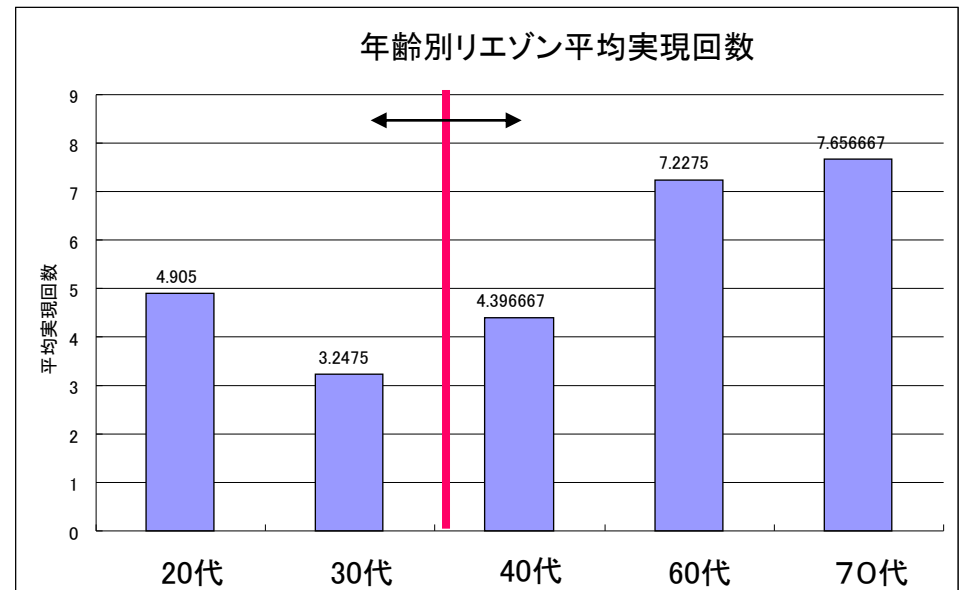
①20～30代を年齢が低いグループ

②40～70代を年齢が高いグループ

帰無仮説:「2グループ間に差がない」

T検定 (t値 = -1.77672 p値 0.097 > 0.05)

→有意差なし



年齢②



①20~40代を年齢が低いグループ

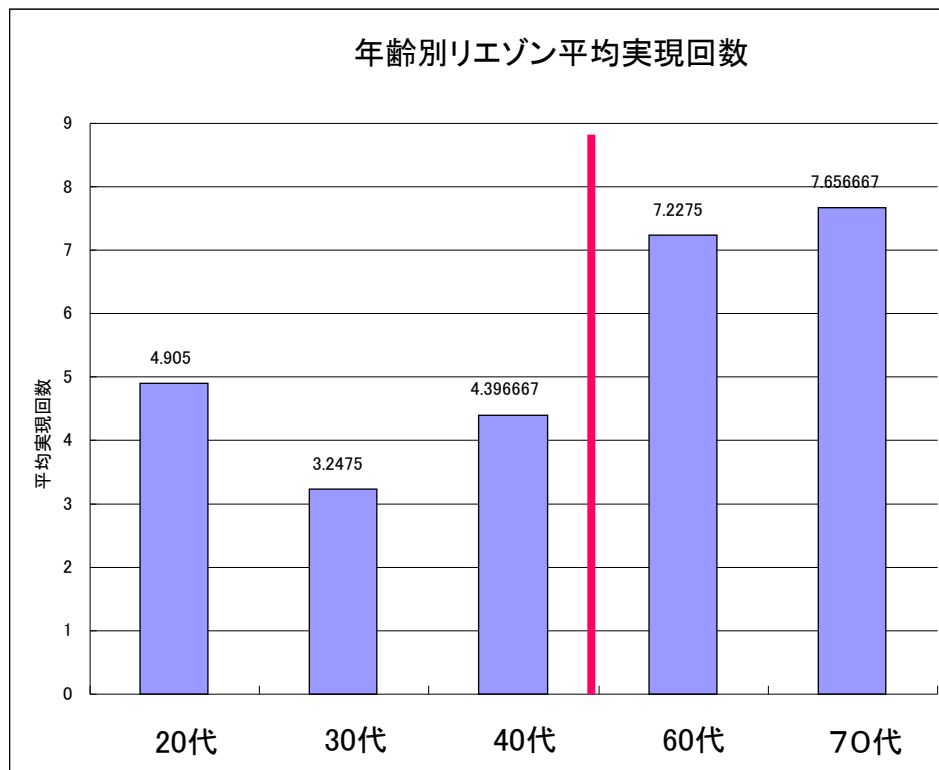
②60~70代を年齢が高いグループ

帰無仮説:「2グループ間に差がない」

T検定 (t値=-2.0311、
p値= 0.0979>0.05)

→有意差なし

以上の点から、AIXコーパスにおけるリエゾン実現に年齢の影響は顕著ではない。



性別



- リエゾン平均実現回数

男性:4.17回/min

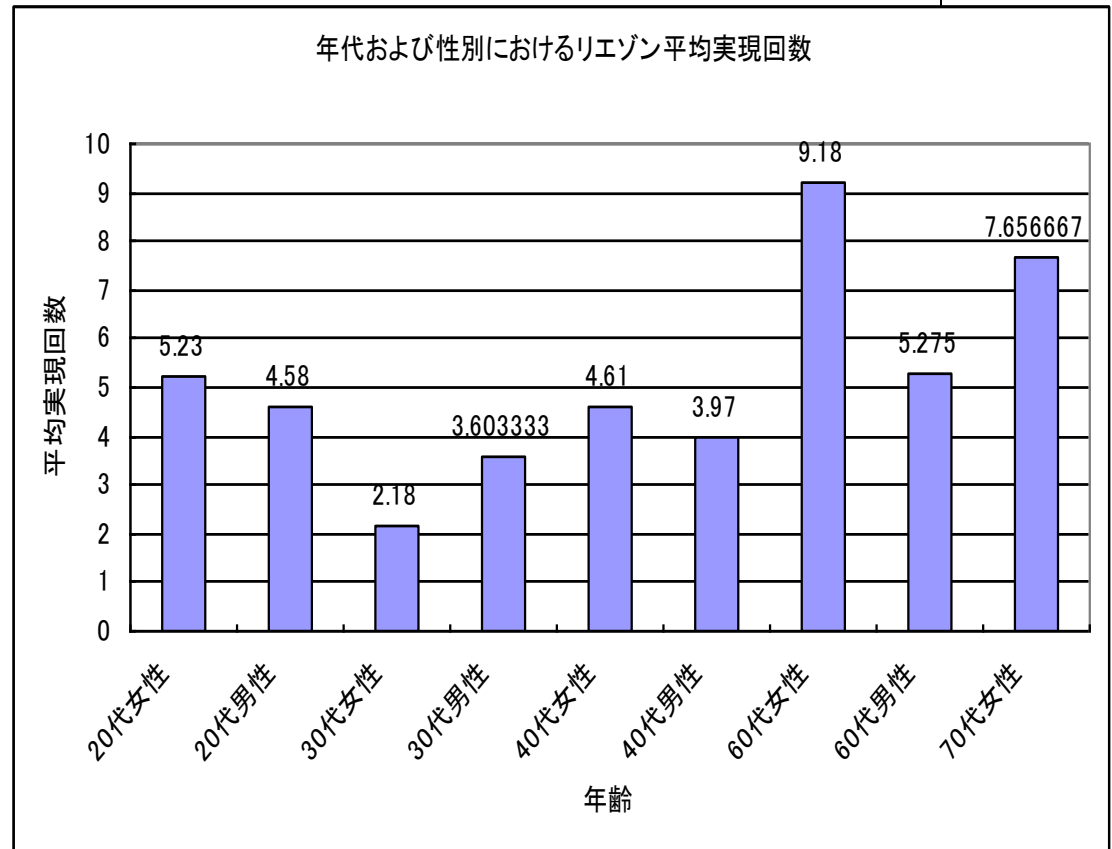
女性:6回/min

帰無仮説:「男女間に差がない」

- T検定(t値=1,3779

p値= 0.1898>有意水準0.05)

→男女差に**有意差なし**



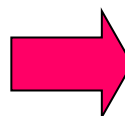
発話内容と発話状況



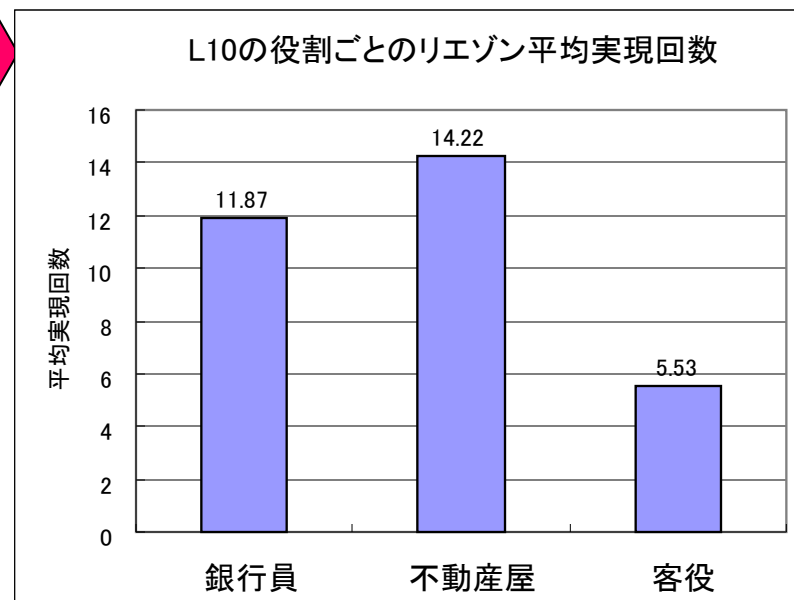
即興劇と自然会話での比較

- 即興劇の平均: 6.75回/min (職業従事者役: 9.63回、客役: 3.86回)
- 自然会話では: 5.2回/min

- 特に一人のインフォーマント(L10、女性)は、即興劇での役割によって、リエゾンの平均回数に変化がある。



→リエゾンが職業的に求められる丁寧表現である可能性?





発話内容と発話状況

①自然会話②職業従事者役 ③客役の間における比較

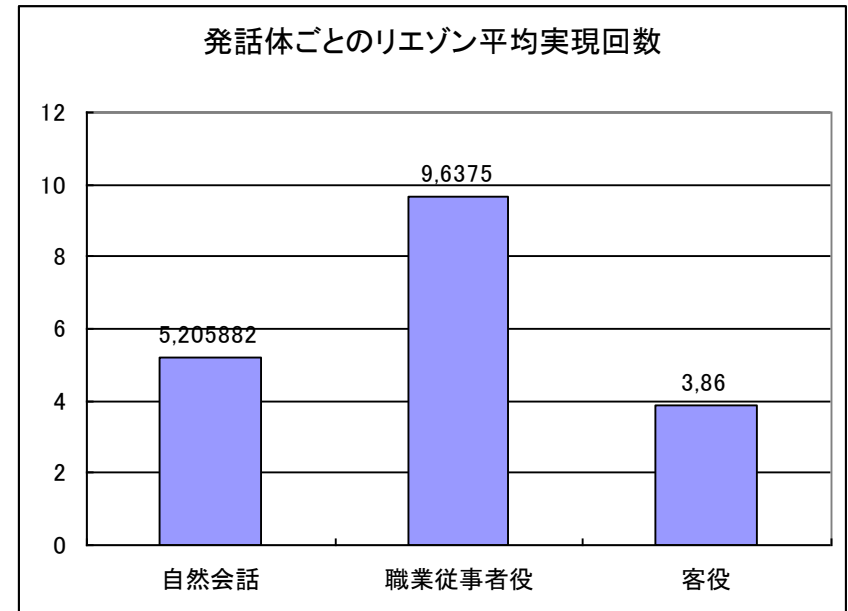
帰無仮説: ① = ② = ③として、

- 一元配置の分散分析を行う
(検定統計量 $F=5.155 > F$ 境界値 3.44 、
 p 値 $0.0145 < \text{有意水準} 0.05$)

→ 有意差あり(帰無仮説は棄却される)



それでは、どの発話体の間に
差があるのだろうか？



発話内容と発話状況



多重比較(テューキーの方法)を用いた結果:

1) 自然会話vs職業従事者役

(q値 $4.43 \geq 4.26$ (HSD値))

→ 有意差あり

2) 自然会話vs 客役

(q値 $1.35 \leq 4.26$ (HSD値))

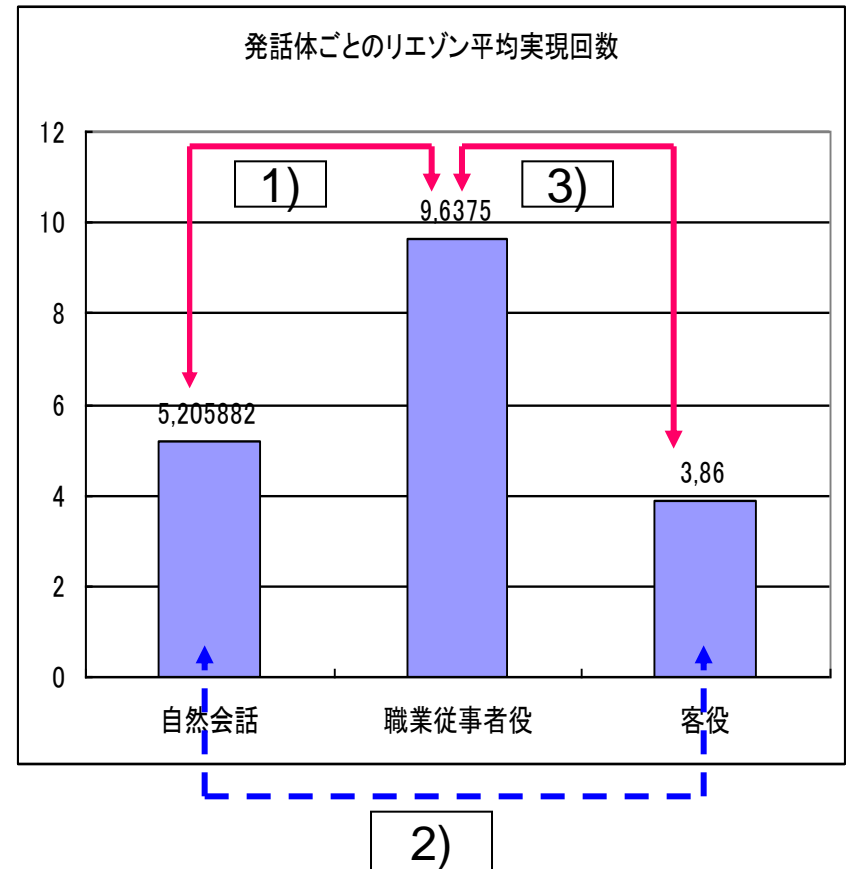
→ 有意差なし

3) 職業従事者役 vs 客役

(q値 $5.78 \geq 4.26$ (HSD値))

→ 有意差あり

以上の結果から、職業従事者の発話ではリエゾンの実現率が他の発話体と比較して上昇するといえる。



考察



- 職業従事者役（旅行代理店の店員、銀行員、不動産店員、市役所公務員）は、発話時に客との応対に丁寧さが求められる場合、リエゾンが意識的に実現する傾向あり。
- 発話内容が日常会話であっても、丁寧さが要求されると発話者が感じた場合には、リエゾン実現率が上昇する。

終わりに



- AIXコーパスの分析では...
 - ①年齢、性別→影響断定できなかった。これらの要因についても考察していく必要性。
 - ②会話内容と会話状況→客の応対時に丁寧さを求められることから、リエゾン実現率が上昇する。
→リエゾン実現が丁寧さを示す。

ただし、即興的発話はインフォーマントが現実的にはその職業に従事しているわけではないので、「演じて」いる。この点は、実際の職業従事者の発話をコーパスとしたわけではないので、推論にとどめる必要性がある。

参考文献



- Ågren, J. (1973). *Etudes sur quelques liaisons facultatives dans le français de conversation radiophonique*. Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.
- Armstrong, N. (2001). *Social and stylistic variation in spoken French: a comparative approach*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Ashby, W. (1981). French liaison as a sociolinguistic phenomenon, In Linguistic symposium on the Romance languages (9th), Cressey, W. W. and Napoli, D. J. (eds), 46-57. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Booij, G., De Jong, D. (1987). The domain of liaison: Theories and data, *Linguistics* 25 : 1005-25.
- Delattre, P. (1966). *Studies in French and comparative phonetics*. The Hague: Mouton.
- Encrevé, P.(1988). *La liaison avec et sans enchaînement*. Paris : Éditions du Seuil.
- Fouché, P. (1959). *Traité de prononciation française*, 2ème édition. Paris: C. Klincksieck.
- Howard, A. (2006). Morpho-phonetic variation in the spoken French media: A comparison of three sociolinguistic variables, *Estudios de Sociolingüística* 7. 1-29.
- Léon, P. (1992). *Phonétisme et prononciations du français*. Paris: Edition Nathan, 4ème édition, Paris: Armand Colin, 2005.
- Malécot, A. (1975). French liaison as a function of grammatical, phonetic and paralinguistic variables, *Phonetica* 32:161-179.
- Ranson, D. (2008). La liaison variable dans un corpus du français méridional : L'importance relative de la fonction grammaticale, *Congrès Mondial de Linguistique Française-CMLF'08*, Durand J. Habert B., Laks B.(éds). Paris: Institut de Linguistique Française.
- 小川敬洋 (2006).『コーパスに基づいたフランス語の条件法における婉曲表現』東京外国語大学大学院平成18年度修士論文.
- Aix-en-Provenceコーパス(フランス語多言語話しことばコーパス):
http://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual_corpus/fr/ (アクセス日:2010年4月18日)